1991年12月25日

ペシャワール会報

No.30

ペシャワール会　〒810　福岡市中央区大名一丁目一〇一二五　上村第二ビル三〇七号
電話・FAX　〇九二（七三一）二三七二

●変貌　らい病棟の女たち　2 …… 中村　哲
●ハリ治療が喜ばれています …… 林　達男
●スタッフと会話できたら、言うことなし …… 松本智子
●何もできなかったんだと知ることが大事 …… 島村教子
●懐中電灯片手に手術しています …… 藤田千代子

雪の中の親子＊表紙絵　甲斐大策

ペシャワール会は1983年９月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

変貌

らい病棟の女たち　2

ペシャワール・ミッション病院医師
JAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)顧問医師
中村　哲

怒り・悲しみ・絶望

妹のハリマは病棟に取り残されていた。らい反応がくりかえし体を痛めつけていた。喉頭浮腫で声がかすれ、しばしば呼吸困難と肺炎に陥った（その当時、らい反応の特効薬は手に入らなかった）。「殺してくれ」という痛々しい叫びも無視して病状のおさまるのを待つ以外になかった。私が密かに抱いていた暗い自問は、このまま重症肺炎に陥らせて死を待つべきか、何とか生きながらえさせるかということであった。これを冗談で紛らわせて患者に気休めを述べるのは容易ではなかったのである。

数ヶ月の後、たまりかねた私は、ついに器官切開にふみきった（器官切開とは、喉に穴を開けて、呼吸を妨害している喉頭や声帯を経ずに直接器官に空気が通るようにする手術である）。当然、患者は呼吸困難からは解放されたが、声を失った。同時に、それはまともな社会復帰が困難になったことも意味していた。

ハリマという患者、ハリマという一個の人間はこれで幸せだったのだろうかという疑問は、しばらく自分を暗い表情にしていた。また、その当時のアフガニスタンとペシャワールの状況は余りに絶望的であり、「人間」に関する一切の楽天的な確信と断定とを、殆ど信じがたいものにしていたからである。まるで闇の中から激しく突き上げてくるような、怒りとも悲しみともつかぬ得体の知れない感情を私はもて余していた。人間の条件――乏しい私の頭脳で答えを得ることは到底不可能であった。だがおそらく当のハリマという患者自身もこの疑問を共有していたに違いない。イスラム以外に語る言葉をもたぬ者には、その率直な泣き叫びそのものが雄弁であった。

自分もまた、患者たちと共にうろたえ、汚泥にまみれて生きてゆく、ただの卑しい人間の一人に過ぎなかった。ただひとつ確信できたのは、小器用な理屈や技術を身につけてドクター・サーブと尊敬されていても、泣き叫ぶハリマと全く同じ平面にあるという事実だけであった。

暗いクリスマス

この一九八六年の暗いクリスマスを私は一生涯忘れることができない。ソ連軍はペシャワール近郊のカイバル峠に迫っていた。峠のてっぺんでは激戦が展開され、負傷者を乗せた車が連日連夜、市内の各病院と峠を往復していた。市民たちは絶えざる爆破工作におびえていた。冬の雨季に入ったペシャワールの空はどんよりと鉛色に曇り、砲声が間断なく市内まで聞こえていた。ふるさとに帰れぬ者、ふるさとを失った者たちが病棟とベランダにあふれていた。収容しきれぬために一部はテントにベッドを入れて寝かせていた。

当時所属していた或る海外医療協力団体からは、はるかに離れた国外で行われる「重要」会議に出席するよう矢の催促が来

ていた。

「発展途上国の現実に立脚して海外ワーカーとしての体験を分かち合い、アジアの草の根の人々と共に生きる者として……。美しい自然と人々に囲まれたアジアの山村で語らいの時を……」

白々しい文句だと思った。美しく飾られた言葉より、天を仰いで叫ぶハリマの自暴自棄の方が真実だった。この非常時に患者たちを二週間以上も置き去りにする訳にはいかなかった。が、このペシャワールの状況を日本側に伝えるのは至難の業でもあった。無駄口と議論はもうたくさんだ。最後通牒のような「出席命令」を力を込めて引き裂いた。私は、催しものと議論づくめの割に中身のない「海外医療協力」と、この時決別したのである。

らい病棟の母と子

つかの間、いのちの暖をとって

クリスマスの日、ペシャワールで一番上等のケーキをヤケになって大量に買い込み、入院患者全員に配った。山の中から出てきた患者には恐らく最初で最後の豪華な食べ物であったろう。あるスタッフが言った。

「ドクター、奴らにはこの味は分かりませんぜ。この小さいケーキ一個二〇ルピーで一週間めしが食えると聞きゃあ、口が腫れますよ。もったいねえ」

「かまわん。ミルクをたっぷり入れた上等のお茶と一緒に五〇名全員に配れ。これくらいの贅沢は、たまにはさせろ。俺の道楽だ」

底冷えのする病棟にはストーブもなかったので、ガス・ストーブを全室に備えさせた。冷たい病室には暖かい火が燃え、患者たちは見たこともない高級の洋菓子と熱い茶をすすりながら談笑した。久しぶりに笑顔が病室にあふれていた。連日の過剰な労働で疲れていたスタッフたちも、それにつりこまれて幸せそうだった。

例のハリマも同室の女性患者と共に笑顔で向かい合っていた。変形した手で器用に気管切開の部位を押さえ、かすれ声をふりしぼって談笑し、ケーキをぱくついているのを見て私はほっとした。

鉛色の空と冷たい雨にこだまする砲声の下、迫害と戦乱に疲れた者にとっては、たとえ一瞬でも暗さを忘れる暖かさが必要だったのである。それが私の感傷から出たものであろうと、口の中でとろけるケーキの一片と共に命あることの楽しさを思い起こせば、それでよかった。彼ら患者たちとハリマの笑顔こそが何よりも代えがたい贈り物であった。

（続く）

一九四六年福岡市に生まれる。一九七三年九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッション・ホスピタルに赴任。らいを中心にしたアフガン難民の診療に携わると共にJAMS（ジャパン・アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタンでの医療活動をめざして現在に至る。著書に『ペシャワールにて』（石風社）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

ハリ治療が喜ばれています

JAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)放射線技師　林　達男

アッサラーム・アレイコム・チトラスト。ペシャワール会のみなさんお元気ですか？

早いもので、もう一ヶ月半。食事も生活様式もだいぶなれました。はじめウジムシが盛ってあるように見えたこちらの米のメシの、味にも臭いにもなれて、この頃は皿一杯食べています。

仕事の方は、前任者の前田さんがよく指導して下さっていたので、私は電圧や電流やタイムのチェックをすればよくNOとOKでこと足ります。

また最近は非常にすばらしいレントゲン写真がとれるようになりました。脊骨の側方の写真も出来るようになりました。アサドの助手のナビも撮影できるようになりました。アサドも私も英語が出来ないのですが、身ぶり手ぶりで会話しています。心がかよえばどうにかなるものです。ナビも現像のこつがまだのみこめないようですが、胸部や腹部の撮影ぐらいは出来るようになり、本人も大変喜んでいます。

私が鍼(はり)が出来るという話をした処、胃痛と背中の痛みで苦労していたドクター・シャワリが治療してくれとのことでした。私の室で四日ほど治療した結果、痛みも消えて大変喜んでもらいました。

さらに喘息や神経痛にも効くという話をしましたら、さっそく入院患者にも治療を施してくれとのことでした。女性の患者さんには事情を説明してもらい、ドクター・ルームで治療した処その効果が出て、二人の女性は退院して行きました。

今では院長室の隣に新品の治療台も入れてもらい、毎日七、八人の患者さんが来ています。経過はそれぞれ大変良く、患者さんから「タシャクル　タシャクル（ありがとう）」と言われて気を良くしている自分です。

言葉はダルト・ミッニ（痛いか）とカムシュダ（軽減、軽快）ぐらいですが、私が困っている時はスタッフが助けてくれます。こちらの人たちは皆親切ですので、毎日が楽しくほがらかにくらしていますので、ご安心下さい。

朝九時から夕方五時まで多忙ですが、このことを通して現地の人達の幸福と平和なくらしが一日でも早く来ることを祈っています。

中村先生は毎日が多忙で、ミッション病院とJAMSとの間を行ったり来たりです。

ハリ治療中の林さん

その上、事務的な処理や現地政府との接衝等多忙の極みです。さらに毎夜三姉妹の現地語の指導で、宿舎への帰宅は毎夜十二時近いです。先生の健康が心配です。早く多くの助っ人が日本から来ることを願っています。事務処理の出来る人や長期間働ける人が必要です。

文章を書くのが苦手な上に長文を書いたので目がかすんできました。この辺で筆を置きます。

スタッフと会話できたら、言うことなし

ペシャワール・ミッション病院看護婦　松本　智子

みなさまお元気ですか。こちらに来てもう早や二ヶ月を迎えようとしています。その間ウルドゥ語の特訓をして戴いたのですが、それもむなしく、まだ会話が出来ないのです。これが今一番の悩みの種ですが、ボチボチ頑張ります。

仕事の方は結構楽しいです。ふだんあまり外出しないせいか、フィールドワークへ出掛ける時など風景を楽しんでいます。女性は家の中まで通してくれますので、色々な住まいを見ることが出来て、それもまた楽しみの一つです。

フィールドワークには藤田さんに同行するんですが、「私は言葉がわからないから……」と自分の中で言い訳して、もの珍しくてキョロキョロあたりを見まわしては、「こんな所でのんびりすごしてみたいな」などと考えているのです。我に返ると、すぐ横には、一生懸命家族関係を問いただしている藤田さん。「あっこれじゃいかん！」とわが身を叱咤激励するありさま……。でも庭先にはニワトリの親子が自由に歩き回り、奥にはのんびり寝そべっている牛、子どもたちは素足で泥やほこりだらけで、人なつっこい顔でそばに寄ってくる――田舎育ちの私には幼い頃を思い出させるような一面があり、なつかしさがこみあげてくるのです。

またこちらの人は年齢不詳でして、常にタクリバーン（約）がついて、二十五歳であれば、十本の指を二回、そして片手を一回出して、ラス（10）＋ラス（10）＋ピンズー（5）＝25とパシュトゥ語で教えてくれるのです。時には、えっ、この人が十五歳?!　この人が三十歳?!　と頭を悩ませる人もいますが、タクリバーンですのでいいのでしょう、きっと……。私はこのことばがすぐ気に入りました。そしてこんなのどかな光景も大好きです。

手術中の左から中村先生、藤田さん、松本さん

病棟の方は、患者さん同士で助け合っており、とても感動的です。見ていて気持ちがなごみ、ここへ来てよかったなあと思わせてくれるのです。

あとはスタッフと会話が出来たら何も言うことなしに近いのですが、その日が早く訪れるのを期待しながら、今日はこの辺で失礼いたします。

何もできなかったんだと知ることが大事

ペシャワール・ミッション病院理学療法士　島村　教子

昼間は仕事、夜は語学の特訓とまるで合宿生活のような日々の中で、ようやく少しですが、ゆっくり息ができるようになりました。

仕事の内容は傷のつけかえやギプス巻きなど、初めてのことも多く、今まで一般のP・T分野という狭い範囲でしか働いたことのない私にとって、毎日が実習となっています。言葉はあまりできないし、仕事も教わることばかりで、使いものになるには当分かかりそうです。中村先生に「自分が何かできると思ったらまちがいで、ここに来て、自分は元々何もできなかったんだと知ることが大事」と言われたことを実感しています。

スタッフは皆明るくて、しばしば「シスター元気か?」と声をかけてくれます。最低賃金といわれる給与の中からチャイをおごってくれたり、根気よく言葉を教えてくれたりします。

患者さんのなかで、特に中高年の男性にいい表情をした人が多く、子供のような純真さや可愛らしさを感じさせてくれます。日本人のオジサンたちとはずいぶん表情が違います。

オジサンといえば、研修のため三週間ほど下宿したお宅のご主人は、夫や父親の鏡のような人で、せっせと家事を手伝い、子供の世話をし、「僕はsecond motherだよ」とウィンクしていました。アイロンかけをしながら、「これは簡単な仕事だから自分でもできる」と言って全く苦にしていませんでしたし、「パキスタンの中流階級の男性は皆奥さんの手伝いをするよ」と言っていました。しまいには「だからあなたもパキスタン人と結婚すると幸せ♡」とも言われました。

下宿先の食事は美味しくて一度も困ったことはありませんでした。けれどきわめて質素で冷蔵庫の中はヨーグルトと野菜・卵が少しといったくらいで、日本の冷蔵庫の中身とはずいぶん違いました。

英語が話せて元教師という奥さんは、かなりの教育ママで、毎日厳しく二人の子供に勉強を教えていました。敬虔なイスラム教徒の家で、毎夕子供にコーランを教える先生が来て、三十分程レッスンしていました。日本の今の時代の子供たちと変わらないくらいの忙しさで、こんなに勉強して大丈夫かなと少し危惧を覚えました。

研修をしたネパールやイスラマバードの病院は、物は少ないけれども、仕事の流れは日本の病院のようでした。きっちり分業され、キビキビと人が働いていたのが、ペシャワールにいるとかえって異様に思えま

す。ゴチャゴチャして整ってはいないけれど、にぎやかで楽しいペシャワールの街やここの病院の方が居心地がいいです。日々いろいろな人に助けられ励まされながらなんとか歩むことができています。

追伸　その1　林さんがハリができるおかげで、以前から少し悪かった腰が痛んだとき、くまなく治療していただきました。ありがとう林さん！　でも背中とはいえ、見られてしまったのは恥ずかしかったです……。

追伸　その2　旅の御一行の中で、唯一福元さんと面会できず、とても残念でした。自慢の料理も食べられなかったなあ。高給優遇、請う！　料理人。またゆっくり来て下さいね。

懐中電灯片手に手術しています

ペシャワール・ミッション病院看護婦　藤田千代子

ペシャワール会の皆様、お元気でしょうか。私たちの家の庭に今年もまた、菊の花が咲き始め、日本の（特に磯公園＝鹿児島）菊まつりを思い出しています。

早くもペシャワールへ戻って来て二ヶ月余りがすぎました。昨年に比べて今年は寒くなるのが早いようで、ここに着いた時は室温が三〇度～三四度ほどありましたが、今では二四～二六度くらいになり、朝晩の冷え込みが厳しくなったので、十日ぐらい前よりストーブをたき始めました。

らい病棟では早速手術も始まり、足底潰瘍のガーゼ交換やたこ削りなどしていると、まるで日本での休暇が夢だったように思えてきます。

最近、ペシャワールでは、停電がしばしばあります。先々週、先週と特別に週二回手術があったのですが、毎回停電があり、懐中電灯を使って何とかなっています。あんまり頻繁なので、昨日はとうとうゼネレーターを買いに行きました。停電と同時に断水もあって、なかなか仕事がはかどらなくて、気のせいこともよくありますが、この人たちはあわてることもなく、ゆったりとして、タンクにどこからか水を汲んできてくれて、これもなんとかなります。どこでもそうなのでしょうが、本当になければないなりに何とかやれる（何とかする）もんだなあとか、何とかすること（しなければならないこと）の多い所だなあと、ペシャワールに来て感じています。

日中は病院の仕事、夜は中村先生のウルドゥ語教室と、今はあわただしく毎日を過ごしています。そして、少し時間ができると眠ってしまいます。

それでは皆様もお元気で過ごされますように。

右から藤田さん、島村さん一人おいて前田さん

●事務局だより

＊悲しいことをお伝えしなければなりません。

当会の事務局長の佐藤雄二氏（国立肥前療養所医師）が、十二月九日午後二時十七分九大病院で亡くなりました。四十三歳でした。佐藤先生は、中村先生の九大医学部時代からの友人で、ペシャワール会創立にも奔走され、会運営の裏方の支柱として尽力されてきました。その誠実ですべてを包みこむような人柄が、事務局の雰囲気をオープンで柔らかくまた持続性のあるものに醸成してきたのだと思います。昨年の暮れから何の前ぶれもなく始まった一年間の闘病生活は、ご本人、ご家族ともに大変つらいものだったと思いますが、その間いつも会のこと、中村先生のことを気にかけていらっしゃいました。佐藤先生の暖かいまなざしと深い思いやりを失ったことはとても無念なことですが、生きてある者たちがその志を継いで一歩でも歩んでゆきたいと思います。

＊また新聞等でご存知の方も多いと思いますが、昨年の総会で特別講演をお願いした「風の学校」の中田正一先生が、十月二十七日未明亡くなられました。八十五歳でした。先生は手掘り井戸の技術をアジア各地で指導されてこられましたが、常に現地の実情に合った自力援助の「適正技術」ということをおっしゃってこられました。先生のエネルギーと言葉は私たちに深い印象を残しました。

お二人のご冥福をお祈りします。

＊中村先生はじめワーカーの林さん、藤田さん、松本さん、島村さんともに元気です。林さんのハリ治療は殊のほか喜ばれているようです。中村先生、林さんは一時帰国しますが三人の女性はペシャワールで新年です。みなさんご自愛の上、よいお年を！

＊今年も昨年に引き続き、湾岸戦争、ソビエト連邦の崩壊、日米摩擦の露出と激動の世紀末への序曲のような年になりました。世界は、資本の膨張・高度化と戦争（内戦）によって、私たちの意識のスピードを超えてボーダーレスに加速してゆくようですが、こういう時代だからこそ地を這うもの（私たち自身を含め）への感受や想像力が必要ではないかと思います。

〔お願い〕当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMCA内ペシャワール会宛てお願いします。

（〒810 福岡市中央区天神一丁目10－24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9－6559 ☎七二－七四〇）

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ

●増補版

ペシャワールにて

――癩（らい）そしてアフガン難民

中村哲著　四六判上製二六〇頁　価一八五四円

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、およそ凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。

（著者「あとがき」より）

石風社（せきふうしゃ）

福岡市中央区大名1－2－15

電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。

役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARA HOUSE（〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇－二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三一－二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号　毎週水曜日夜七時例会

☎・FAX (092) 731-2372　郵便振替 福岡9-6559

発行年月　1991年12月25日　No.30　事務局長 佐藤　雄二